

第6章 中学校の訪問調査結果

(1) A 町立 A 中学校

1 学校の概要

当校の教職員数は、11名、児童数は全校生徒35名（3学級）の小規模校で、同県内の離島にある中学校である。同島は、大きくふたつの地区に分かれており、そのひとつの中心に位置する学校である。小規模校とはいえ同島最大規模の中学校でもある。全国学力・学習状況調査の結果が良好とはいえない同県であるが、他の都道府県において最も良好な学校と比較しても遜色のない、非常に良好な結果を示している。

同島は、戦前から（比較的、同県離島には多く見られるように）サトウキビ栽培を中心とする農業が盛んだったが、現在は、観光業が中心的な収入源となっており、観光業に従事している家庭の収入は、農業による収入に比して比較的高く、安定しているとのこと。同校に通う生徒たちの家庭も、観光業関連に従事するところが多く、「収入も安定しており、家庭が学校に対し協力的であることが、本校、及び、本校を含む本自治体全体の学力調査結果が比較的良好な要因のひとつではないだろうか」と当該校の学校長は話す。しかし、同自治体内で、特に観光業が盛んなことで知られる地域の中学校の全国学力調査結果を見てみると、当該校のような良好な結果を示しているわけではなく、一概に、観光業＝高収入＝安定した家庭＝良好な学力調査結果とはいえないようである。やはり後に紹介する同校独自の学校経営、及び指導改善の工夫が成果につながっていると考えられる。ちなみに、同校に在籍する生徒の家庭において、観光業に従事する家庭には他都道府県からの移住者が多く、例えば、良好な結果を残した3年生の生徒の家庭の、約半数は両親が、ともに他都道府県からの移住者であるという。

同島内には高等学校はなく、卒業後はこの離島を出て近隣の島の高等学校等に入学し、ひとり暮らしをすることになる。そのため、校訓のトップに「自主」をあげ、めざす生徒像の第一に、「深く考え、自ら進んで意欲的に学習する生徒」を挙げている。このことは、後に紹介する、同校生徒の主体的に学習に向かう姿勢を定着させるための取組とも関連している。

今年度の研究主題は、「主体的に学ぶ生徒の育成～ICTを活用した授業の実践を通して～」となっているが、これは今年度、同自治体から1クラス分のタブレットと3教室分の電子黒板が配布されたため、それらを活用した指導改善を考えていこうと設定したもの。同校の学校長も、「現在の良好な全国学力調査結果とは大きな関わりはない」と話す。

むしろ、学校への聞き取り調査からも、子どもたちの実態からも多大な影響があったと考えられるのは、現学校長が3年前、同校へ異動後打ち出した、「自立型人間十箇条」であろう。内容の詳細はしないが、基本的な生活習慣やマナーの定着、授業姿勢や家庭学習習慣の徹底を強く打ち出し、力を入れてきている。しかも、それが単なるスローガンではなく、実践させていくための具体的な手だてがしっかりと考えられ、実践されていることが大きい。

例えば、「早寝早起き朝ご飯」を徹底するために、同校では同学校長の発案で、部活動の朝練習を開始した。これによって、部活の大好きな子どもたちは早朝に起きて、7時から約40分程度、朝練習。その後、軽く、家庭で作ってもらった、おにぎり等の朝食をとってから、朝学習や授業へと入る。これによって、血流も血糖値も上がって、脳も活性化した状態で、1時間目からの学習に入ることができる。

あるいは、生活習慣、学習習慣を主体的にコントロールできる生徒に育てるため、市販のスケジュール管理用手帳を導入。宿題も1週間分をまとめて生徒に与えることによって、生徒たちが主体的・計画的に宿題や家庭学習を行うようにしている（後に詳報）。

こうした、自立のための徹底した動機づけと、具体策がうまく機能し、生徒たちの間に、主体的・自律的に学ぶ姿勢が築かれている。

2 授業づくりの特徴

各教科の担任は1名ずつであり、授業づくりについては、各担任に一任されている。研究体制として教科を超えた指導観の共有が特別になされているとは言えない。授業は、同校の1年、3年の数学、2年の国語を見学した。ここでは、全国学力・学習状況調査で、AB両問題ともに、全国平均を非常に大きく上回った、3年生の数学の授業を中心に紹介する。

同授業では、まず導入で、割れた銅鐸の図を配布（1年の教科書より）。それをもとに、1年での学習である、弧から円の中心を求める方法を思い出させる（簡単な問題による既習の確認だが、半数程度の子が忘れていた）。

そこから、本時の学習である、同一弦上にあると考えられる別の角（別の角をなす点）を求める問題に取り組む。この授業は、問題解決型に近い授業形式をとり、問題提示後、目標（めあてや課題ではなく、目標と記している）を示している。ただし、これは、あくまで教師主体の目標設定であり、全国学力調査結果が良好な県で見られる、生徒自身が設定していくものとは違っている。

当該授業では、目標設定後、教師は自力解決の時間を5分間と設定するが、この間に完全に自力解決をできる生徒はいなかった。設定時間内に自力解決が図れた生徒がいなかったため、この後、教師は子どもの気付きを拾いながら、既習事項等のヒントを出し、解決に取り組んでいく。ちなみに、全学年ともに、10名少々と少人数であるため、（1年の数学、2年の国語でも同様だったが）意図的なペア学習やグループ学習等は行われていない。

ただし、教師が中心となる解決の過程で、生徒同士、教師と生徒の間の会話が非常に多く行われている。もちろん、すべて学習に関係する内容であり雑談はほとんどない（これは授業全般にわたって見られる傾向だった）。この間、教師は子どもの発言、つぶやきに対して、否定的な発言をしないため、子どもたちは安心して自由につぶやいている。さらに、教師は声の小さな子（大きな声で学級全体に対して話すのが苦手だと思われる子）に対し、要所要所で近寄り、発言を促している。自力解決中のわずかな時間を除き、フォーマルなものやインフォーマルなものが混在した状態で、常に、子どもたちが学習内容に関わる発言をしている状態である。しかも、子どもたちはそうした学習上の会話をとても楽しんでいるようで、授業中の様子を撮影した写真には多く笑顔が見られた。

問題解決後、練習問題を行っていたが、学習のまとめや振り返りは行われていなかった。

授業構造は、例えば、全国学力調査結果が良好な県の学校で一般的に見られるように、問題を読んだ後、子どもたちが課題を設定して自力解決を図り、学び合う場面では誤答も含めて子どもたちが発言して思考を高めていく。さらに、学習をまとめ、適用問題や評価問題を行った後で、振り返って、メタ認知もしっかりしていくというような、練られたものとは少し異質なものだと感じる。

しかし、同校の数学の教師は、こう説明する。「授業づくりの基本的な考え方として、数学嫌いをゼロにすることを自分自身の目標にしている。『数学は楽しい』と思わせて、自ら学ぼうとする子どもたちにしたい。そのため大事にしていることは、子どもが活動する場面をできる限り多くつくること。授業中に発言を求める時も、定着に課題がある子には、その子なりに分かる場面で投げかけてみる、定着が良好な子には難しい問題を聞いてみる。状況に応じて、発言機会をもたせるようにしている」とのこと。実際に、同教諭が行った1年生の数学の授業でも、同様に生徒たちが授業中に多様につぶやき、交流する場面が何度も見られた。

実は、この「楽しい授業」が、重要な動機づけとなっており、この後紹介する、学校における多様な学び直しを図る機会、地域支援による学習支援の機会、さらに自律的な家庭学習等と連動して、高い学力を形成しているのではないかと考えられる。

3 特色ある取組

先にも触れたが、同校では、「自立型人間十箇条」に象徴されるように、規範意識を大切にするとともに、より主体的で自律的な生徒の育成を図るために、市販スケジュール管理手帳を使ったスケジュール管理を生徒自身に行わせている。生徒は、同手帳を使って、1日の時間管理を1週間単位で行っている。この取り組みと連動して、毎週末1週間分の宿題を全教科から与えるようにしている（翌週末までに全提出）。生徒は各自、自身の翌週末までの予定を鑑みながら、どのように宿題を行っていくかを、考えて行う。そのため、毎日、平均的に宿題を行う場合もあれば、生徒によっては、平日は徹底して部活動（男子は野球）の練習に力を入れたいと考えるため、週末の間にすべての宿題をやり終えるような例もあるという。このように、自分自身の生活リズムや中心的な課題に合わせ、何でも計画的に行っていける生徒を育成している。

学習の定着を計る機会も多く設定されている。例えば、毎週水曜日の始業前に同県作成の基礎力に関するWebテストを実施（国語・数学・英語の輪番）。8割以上の得点を合格とし、不合格者には再テストを行ったり、課題を与えたりしている。また、11月～12月の間は、放課後毎日1時間、教師による補充指導が実施されている。さらに、週4日、放課後1時間、町予算による学習支援員（元教員等）が配置されており、学校近くの公民館において、補習が実施されている（英語・数学）。

また、各生徒はプリントで与えられるものを除き、家庭学習ノートに書いて宿題を提出するが、その時に、自主的な家庭学習も、同じノートに行って提出している（宿題も含め、1日2ページ以上）。週単位で提出されることもあるが、教師はよく見て細かく評価を書き込んでいる。

その他、聞く態度や話す態度を育成するため、全校で月2回のスピーチ集会（全生徒が年1回発表）

を実施。同会に向けては、生徒は事前に原稿を書き、国語教師と担任教師に見せて、評価を受けて修正をしてから全校生徒に向けて発表をしている。また聞く側の生徒たちは、ただ聞くのではなく、評価する立場を与えられており、内容だけでなく話す姿勢等についても評価することになっている。さらに、読書活動にも力を入れており、毎朝 15 分間の読書活動に加え、月・火には 15 分の読書時間を設定している。

同校では、地域の豊かな自然を生かした体験活動も盛んである。同校区内の川筏下りや、島横断トレイル等を年ごとに輪番で実施。その他、地域の炭焼きの体験、体験ダイビング等も行っており、多くの地域の方々の支援を得て実施されている。特に、島横断トレイルは、1 日がかりの大きな体験活動であり、地域や保護者の支援者の力も必要なものとなっている。

また、多様な部活動の大会へ全校をあげて積極的に参加していることも、同校の特徴と言える、例えば、県全体で行われる合唱コンクールには、昨年度に続き今年度も、同離島がある地域から選ばれて参加する唯一の中学校となっている。運動部の活動等においては、女子バスケットボール部、男子野球部等が地区中体連で優勝するなど安定した好成績を示している。もちろん、小規模校であるがゆえに部活動は、全校が一致団結して取り組むことになり、それも学力向上の一因ではないかと同学校長は分析する。つまり、学力向上にも力を入れているが、「常に、学力向上だけを目標にするのではなく、合唱コンクールや運動部大会等の前約 1 か月～1 か半月前後は、全校で部活動やコンクールに向けた練習に力が入る。そのため、学力、音楽コンクール、学力、運動部大会、学力というように、全校をあげて取り組む目標が一定期間で変わっていくため、集中力が持続しやすいのではないか」というのである。

4 総括的考察

学校全体の取り組みとしては、「自立型人間十箇条」に象徴される、生活・学習習慣の確立の徹底と、スケジュール管理手帳に象徴される、主体的・自律的な生徒の育成に力を入れたことが学力向上の最大の要因であろうと思う。

授業においては、少人数であること、及び、おおらかな同県の県民性を踏まえた上での、実践が実を結んでいると考える。授業は、問題解決的なスタイルをとっているが、生徒たちにとって学習問題が課題にまで高められる授業とはいえない。また、「めあて・課題」の共有や「ふりかえり」等についても、徹底して行われているわけではない。ただし、「学ぶ意欲」を重視しているという同校の基本的な考え方が表れた授業になっている。教師は生徒の発言に対して、あまり否定的な言動をせず、可能な限り前向きに評価している。そのため、ほとんどの生徒が授業中、学習内容に関連する呟きを非常に多く発しており、生徒同士あるいは、教師との会話の回数が多い。こうした、授業中に安心して発言できる環境が、間違いを恐れない姿勢となり、全国学力調査における同校の無答ゼロの一因となっていると思われる。実は、間違っただけでも安心して発言できる授業という部分だけを見れば、毎年、良好な結果を示している秋田県の授業実践例とも通底するところがある。このような授業を通し、生徒たちは学ぶことを肯定的に捉えている。そのため、訪問調査当日、放課後の学習支援員による指導には、多くの生徒が参加していた。しかも、ここでも数学の問題を前に、「ああではないか」「この方法はどうか」と、生徒たちが

顔を突き合わせ、解法のアイデアを出し合いながら学ぶ様子が多く見られた。

同校の実践（特に授業）は、個々の教師のさらなる教材研究、全校での授業構造の改善を行うことなど、まだまだ改善の余地はあるように思われる。ただし、まず教師が授業を楽しみ、生徒たちにとっても「授業が楽しい」と感じられていることが、現在の良好な学力状況の基盤になっていると思われる。この部分は、非常に重要であるとともに、どの学校でも、どの教師でもすぐに実践可能な授業改善の要素ではないかと思われる。

(2) B 市立 B 中学校

当校は、豊かな人間性を持った心身ともにたくましい生徒の育成を教育目標に掲げている。学級数は、特別支援学級を含めて 25 学級であり、やや大規模の中学校である。B 市のベッドタウンとして、30 年ほど前に宅地開発された比較的落ち着いた地域であり、家庭の協力が得やすい。また、地域との教育的連携が取りやすく、地域が学校の教育活動を多面的に支援している。近隣の小学校 3 校と平成 21 年度にコミュニティー・スクールを構成している。比較的、転入生や転校生が多く、市内では文教地区である。

当校では、以下の 3 つの教育目標掲げて、教育活動を行っている。

- ・知 創造 わかる授業の創造、個に応じた指導の充実、家庭学習の充実
- ・徳 友愛 道徳の時間の充実、生き方につながるキャリア教育、地域への貢献活動
- ・体 剛健 弁当の日による食育、体力・運動技能の向上、積極的生徒指導

学力の実態は、県内でトップクラスの結果を安定的に出している。では、当校の学力向上に効果を上げている優れた取組を紹介しよう。

1 全校レベルの取組

まず、全校レベルでの取組を見てみよう。

当校では、次のような 4 つの視点に基づき、全教職員で徹底して取り組んでいる。

①授業改善

- ・学習規律 5ヶ条（チャイム席、道具、挨拶、後ろの棚、床のゴミ・黒板の清掃・机の並び）

②家庭学習の充実

③週テストによる基礎基本の定着（金曜日に 4 日分の朝学習の内容を範囲とした週テストを実施）

- ・週テストは生徒による相互採点、年間実施計画を作成
- ・放課後に再テストも実施している
- ・週テストは、10 分で実施、5 分で採点

④セーフティーネットの構築

・学力の 2 極化の解消を目指す（年間 3～4 回の実力テストにより課題のある生徒をリストアップし対策を書く）

- ・授業における意識的指導に活かす

・図書館見守りボランティア（放課後週 2 回火と木に、保護者による見守り。宿題や自学ノートの作成もさせている）

・大学生ボランティアによって、課題の大きな生徒に週 1 回金曜日に既習事項の学び直し（数学と英語）を 1 年生で実施している

このようにして、学校の平均点は高いが、下位層の生徒は必ずいるため、学力に課題のある生徒へのきめ細かい指導を丁寧に実施している。

2 家庭学習の充実

では上記の中から、家庭学習の充実について具体的に見てみよう。

まず、自学ノートの作成を中学校区内の小学校と連携して小学校4年生から実施している。年間2回自学ノートの展示会（各学校の廊下に）を小中合同で、10月と2月に開いている（写真1）。また、優れた自学ノートは、各教室にも掲示して生徒の意識化を促している（写真2）。また、自学ノートができていない生徒には、昼休みに教師が監督となり自学をさせている。

一方、保護者にも、生徒のコメントを確認して押印をするなどを通して、自学の支援をしてもらっている。

さらに、定期考査前には、家庭学習の計画表を作らせて一年間分を束ねさせている。こうした家庭学習の充実の取組は、長期休業期間中にも行っている。



写真1 優れた自学ノートの廊下掲示



写真2 優れた自学ノートの教室掲示

3 低学力層の底上げ・無解答の減少・児童生徒の意欲・関心の向上

まず、低学力層の生徒へは、金曜塾と呼ばれる個別指導によって意欲向上に寄与している。また、図書館を放課後に開放し、保護者が当番で見守るシステムを取ることで、宿題を終えていない生徒や自学ノートを終えていない生徒などが来て、課題を仕上げることが多い。これらによって、低学力層の生徒の学力の引き上げに努めている。

4 校内研修

当校では、全教員が以下の2つの研究部会に所属する体制をとり、研究組織の活性化のために研究授業を一人ずつそれぞれに1回実施するようにしている。つまり、中学校に多く見られる学年と教科の壁を超えて、協同的な授業研究ができるように配慮している。

- ・縦 教科部（学年を超えて研究し言語活動の充実や教科特性に応じた授業づくりをテーマに）後期
- ・横 学年部（教科を超えて学習規律や交流学習、基礎基本の定着などをテーマに）前期

5 その他の特色ある取組

当校には、保護者と地域が参加する応援団組織があり、環境整備の支援や学校行事の支援、ゲストティーチャーとしての生徒への学習活動の支援などを行っている。

また、特に小中連携プログラムの計画的実施と評価改善を通して、小中連携の活性化を行っている。学校評価システムの機能を充実させ、その中で4者（保護者、生徒、教師、地域）による質問紙調査を用いた生徒の学習場面や生活場面の評価を行い、学習習慣や生活習慣の改善に生かしている。一方、教師と保護者は自己評価を行い、それぞれ授業と家庭教育の改善に努めている。

最近、部活動単位で地域貢献活動を行う、「生徒部伍会」を発足させた。そのねらいは、生徒によるより積極的なボランティア組織を作ることを通して、貢献活動の定着や地域への愛着の醸成などを図ることであり、地域の教育力で生徒を育てるようにしている。具体的な活動としては、地域の清掃活動や地域主催の行事での販売補助などである。この部伍会を発足させてからは、生徒のボランティア活動の態度がとても積極的になったそうである。例えば、生徒自らがボランティア活動の提案をするようになるなど効果を上げている。

最後に、生徒の我慢強さや基礎体力、そして集中力を育てるために、学校から往復40キロを4時間で歩く、保護者実施による「かち歩き」を行っている。

6 総括的考察

当校を訪問してまず印象に残ったことは、校内の全教員で行う組織的な取組が多いということである。学習成果の掲示・可視化による共有化の手だても（写真3・4）、学習規律の徹底も（写真5・6）、そして朝学習やミニテスト、自学ノートなどこつこつ粘り強く学ぶ習慣化についても（写真7・8）、あらゆる面で全校の統一的方法が決められていて、すべての教員が一貫した共通の方法で生徒を指導している。そのために、取組の成果が上がりやすいのであろう。

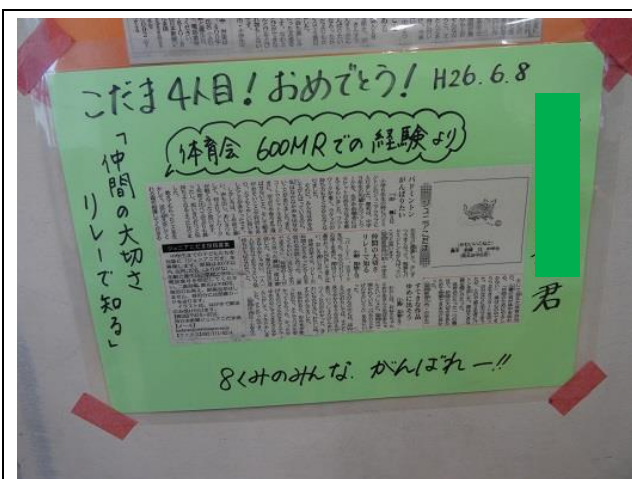


写真3 新聞の投稿欄に掲載された級友の作品を教室掲示している

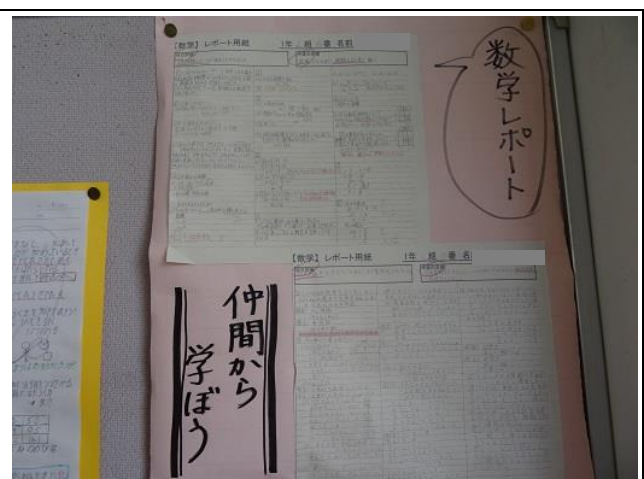


写真4 数学科の優れたレポート作品を教室掲示している

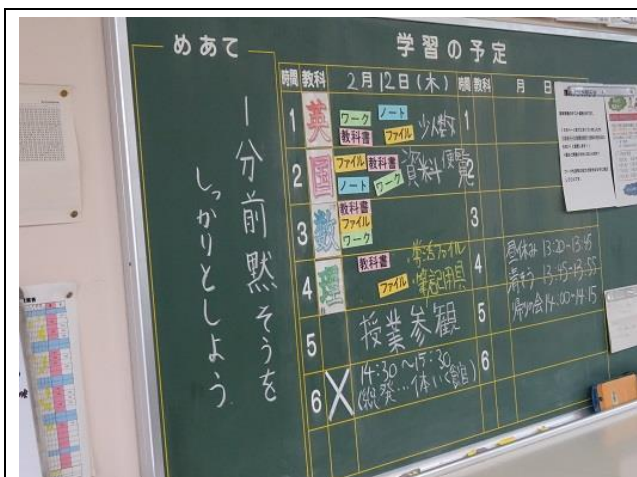


写真5 学習規律を呼びかける板書

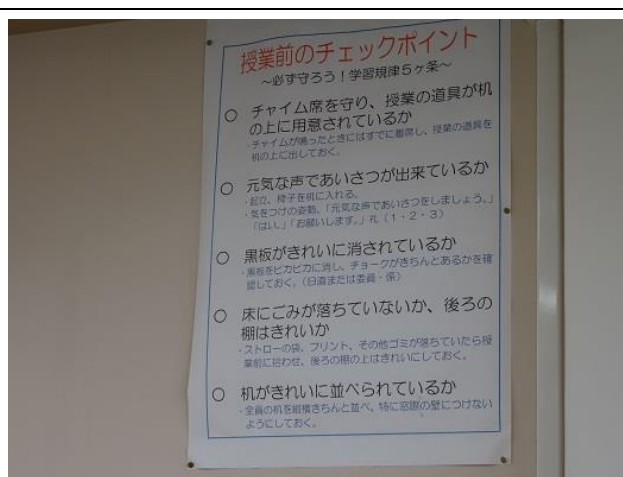


写真6 学習規律5カ条の教室掲示



写真7 各生徒の自学ノートの提出状況

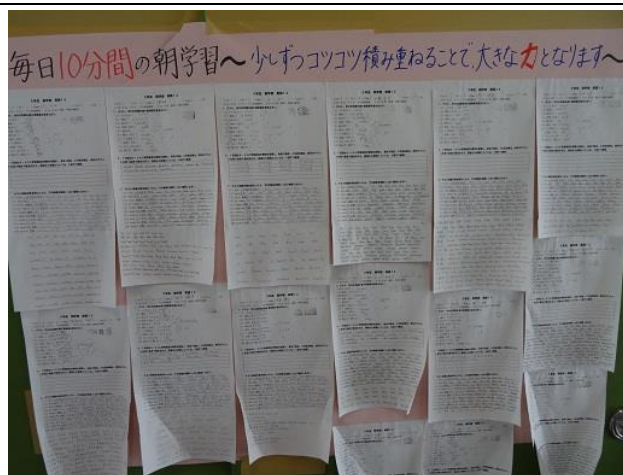


写真8 朝学習のワークシートの掲示

ただし、こうした取組の共通化は、決して本校が落ち着いた地域環境にあるから始められたのではないことに注目したい。確かに当校は、文教地区と呼べる地域にある。しかしそれは落ち着いた環境にあるというだけで、特に高級住宅街にあるというほどではない。ほとんどその逆といえるほど、現在では、生徒の学力の2極化が急速に進んでいることや不登校の出現率が3年生の後半になるほど増えていることが課題意識となって始められた取組が多いということである。つまり、学力不振と不登校が一致する生徒が多くなる傾向があったため、不登校の出現率の低下を目指し、1年生の時から学力の2極化を解消することをねらいとして、低学力層を対象とした多様な取組を充実したそうである。

しかも近年の教員の若年化と講師の増加により、当校でも若い講師が校内の教員の5分の1を占めるまでになっており、教師の授業力と学級経営力の向上が急務となっている。

したがって、当校は、比較的落ち着いた地域にあるとはいえ、急速に広がってきた課題の解決をねらいとして、多様な学力向上策を実践し、つ校内研究システムを動かすという多大な努力をしながら、県内での高い学力の位置を維持しているといえるだろう。

そのために、学校経営において明確なリーダーシップを発揮する学校長と多様な取組の実践力が高い教頭が協力することで、学力向上に向けて学校を組織として動かすことに成功している。

学校長の教訓は、「平均値だけで安心したり油断したりする教師にならないように！」ということであり、低学力層に焦点を当てた教育に力を入れていることがわかった。また、「地域が生徒を育てる」を信条として、学校にしかできないところと、学校ではできないところを区別して地域や家庭と連携した取組を充実させている。

今後の教育ビジョンとしては、平成 27 年度から、一人一人の生徒に自己学力向上プランを立てさせる予定であること、そして授業における活用型学力やアウトプット型学力の育成を目指したいとのことである。

全教員が一丸となって積極的に多様な取組を実施している元気な学校であった。これからも、公立中学校の優れたモデル校として、当校の新しい実践のチャレンジに多くを学びたい。

(3) C 市立 C 中学校

当校では、「人間力を育成するコミュニティー・スクールの創造」を教育目標として掲げ、生徒の学力だけでなく、体力、社会関係力、未来志向力などの総合的な人間力を育てることを教育理念としている。

そして、生徒の課題達成によるやる気の向上をすべての学習場面に適応し、脳科学の成果に基づいた教育を積極的に推進している。

また地域性としては、当校は、C市のベッドタウンとして、40年ほど前から宅地開発されたことを特徴としている。落ち着いた地域であり、また保護者の学校への協力が得られやすく、特に家庭学習の充実へ向けた家庭の支援がしっかりとしている。

では、当校の学力向上に寄与している効果的な取組について、訪問調査の結果を述べてみたい。

1 全校レベルの取組

まず、放課後学習の補足的な取組が成果をあげている。具体的には、宿題をできていない生徒や特別な支援を要する生徒、勉強が遅れがちな生徒、週テストで不合格になった生徒などを放課後に集めて、個別のサポート教員や大学生ボランティアが付いてきめ細かな指導を行っている（写真1）。さらに、長期休暇中も補充学習のための支援ボランティアの大学生が来るシステムになっている。生徒全員を対象とした取組としては、帰りの会の中で10分間の自習による補充学習をさせている。

このようにして、当校では生徒の基礎学力の向上のための教育課程外の取組が充実している。

一方、自学ノートを1日1時間程度かけて作成させ、その中では、毎日学んだことを記録させたり、毎日家庭学習の記録を付けさせたり、さらには体力向上のための運動の記録も付けさせるようにしている（写真2）。こうした日々の学習記録は、学習委員が個票として集計し、学級単位でも集計することで、データに基づいて生徒が自己の学習習慣や生活習慣の見直しができるようにしている。

もう一つのユニークな取組としては、朝学習においては、晴れた日はプリント学習や読書ではなくランニングを実施し、体を動かすことで脳を活性化し一日の学習活動を充実して行えるようにしている。



写真1 放課後の補足的な学習に集中して取り組んでいる

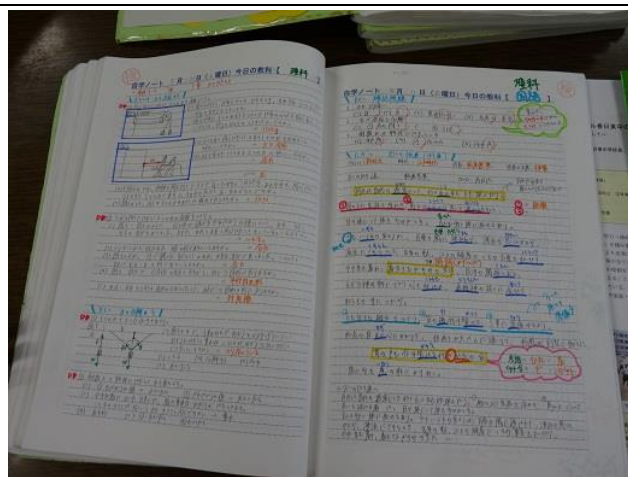


写真2 しっかりとした深い学習内容や生活記録を書き込んだ自学ノート

2 教科指導

当校では、教科学習のことを課題達成学習と名付けて、目的→努力→達成→達成の喜び→次への動機づけという流れを1時間で保証するようにしている。そのために、授業においてはグループワークを積極的に導入していて、生徒の学び合いによって達成の喜びを感じられるように工夫している(写真3)。また、わかりやすい授業の工夫として、ICTを活用した授業も行われている(写真4)。

このことも、脳科学の研究知見に基づくもので、達成の喜びを感じることで脳が活性化し、次の学習への意欲が高まるということである。

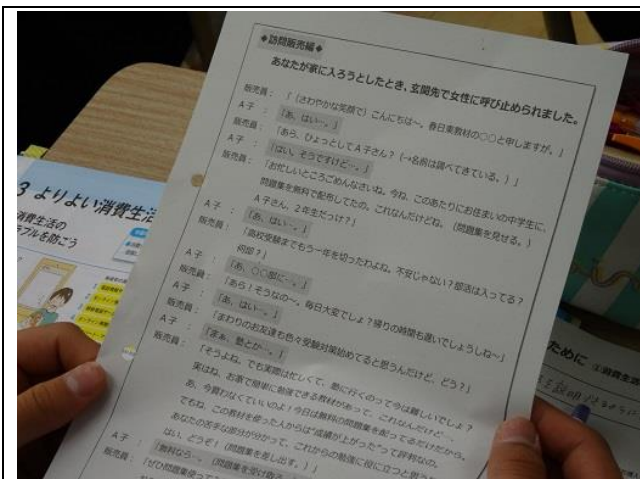


写真3 消費者の望ましい行動についてグループワークをするための教材(家庭科)

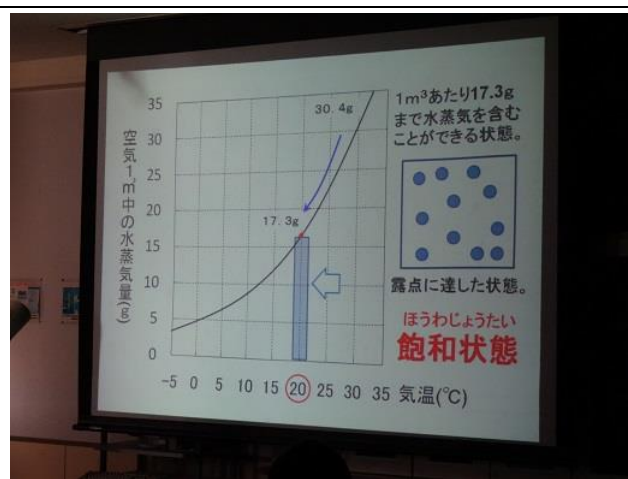


写真4 水蒸気量と温度の関係について解説するためのアニメーション教材の活用

3 家庭学習の在り方・保護者連携

当校の取組でもう一つ大きな特色となっているのは、家庭学習の充実である。例えば、家庭学習ノート（自学ノート）の点検を保護者に依頼したり、家庭の教育力パワーアップ宣言を親子で作らせ、目標の設定と達成、評価を行わせたりしている。また、家庭学習時間を調査して、学級担任に返している。

このようにして、生徒の家庭学習の習慣化をねらいとした指導が充実している。こうした日々の取組によって、どの生徒も優れた内容を持つしっかりとした自学ノートを完成できるようになり、当校の学力向上に大いに寄与している。

4 低学力層の底上げ・無解答の減少

特に理科や社会科等で課題達成学習をしているときに、学習内容をアウトプットするための行動目標を設定して、考えて書いて発表する活動（学習内容のまとめ）を積極的に行っている。生徒に毎時のまとめを書かせてそれを教師がチェックするようにしている。これにより、書くことに対する抵抗感や苦手感をなくそうとしている。

5 児童生徒の意欲・関心の向上

課題達成学習や家庭学習ノート（自学ノート）、業者テスト、放課後の補充学習で、生徒の学習意欲を高めるように工夫している。また、生徒の優れたワークシートや自学ノートを掲示して、友だちのよさから学ぶことができるようにしている（写真5・6）。

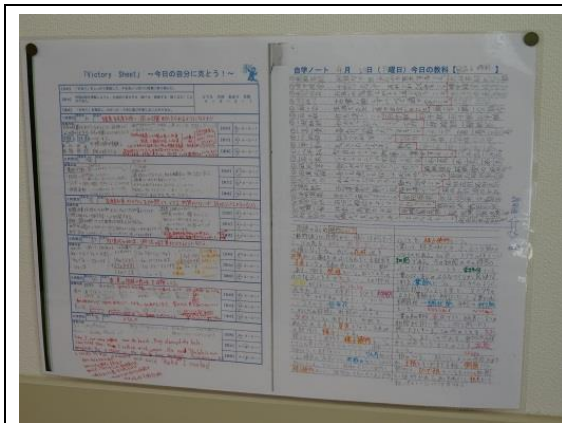


写真5 優れた自学ノートの掲示

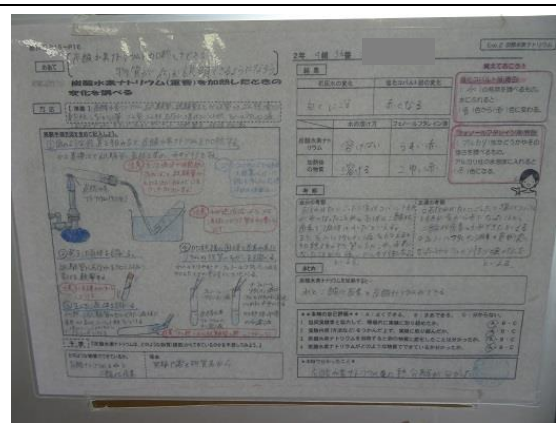


写真6 優れたワークシートの掲示（理科）

6 校内研修

当校では、年に3回全員が校内研究授業をしている。さらに授業に関する全体研究会を年3回、指導案審議を2回行っている。現在は、教科部会で授業を見合うことを活性化している。時間割を変更

して、自習にならないように工夫している。校内での研究授業を通して、すべての教員が自身の授業力の向上に積極的に取り組んでいる。

7 総括的考察

当校を訪問して第一に感じたのは、生徒が素直で何事にも真剣にそして積極的に取り組もうとする姿勢がはっきりと見られることである。学校学習にも家庭学習にも、そして運動や部活にも大変積極的に取り組んでいる。それは、当校のスローガンである、「一流から超一流へ」を胸に刻んで、一人一人の生徒が何事にも頑張っており取り組むからであろう。

しかし、教師が上から指示してやらせるのでは継続的な効果は出にくい。そこで、当校では、生徒が学級内の係の組織や学年生徒会などを通して、自主的・自律的に学級の規律や学習へ取り組む積極性を維持したり高めたりすることを推進している。そのことは、多くの学級に掲示されている、係や学年生徒会からのお願いや呼びかけによく表れている（写真7・8・9・10）。

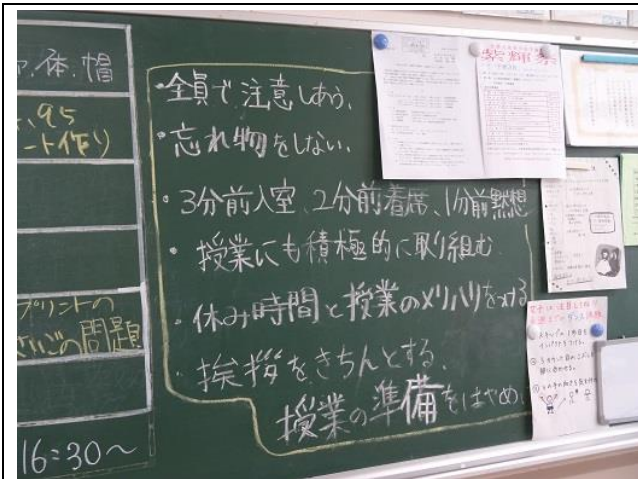


写真7 生徒自らが後ろの黒板に書いている授業規律の項目

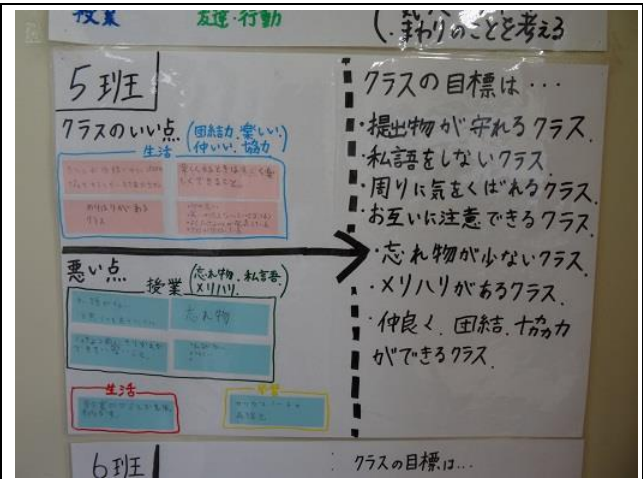


写真8 クラスの目標と課題を各班で分析し、改善案を書いている

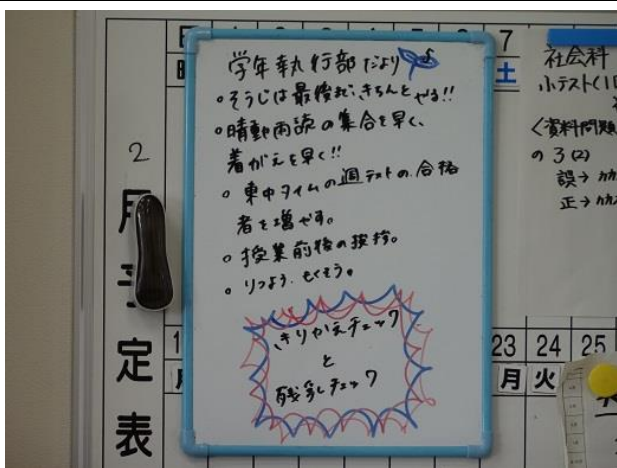


写真9 学年生徒会執行部からの学習規律や生活規律に関する呼びかけボード

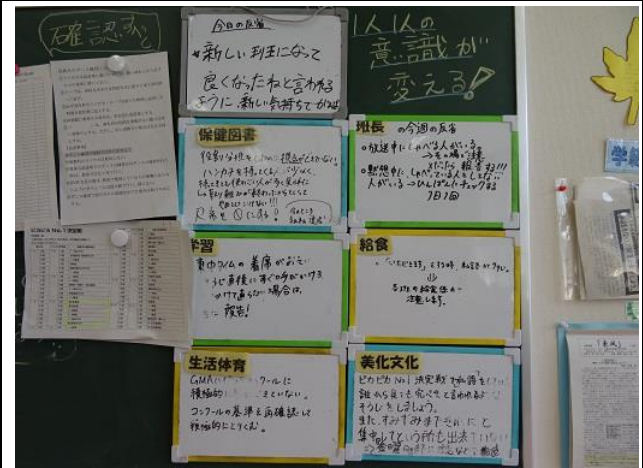


写真10 学級内の各係が呼びかけている規律や課題達成に関する目標やめあて

また、生徒同士のよさを認め合える関係づくりのために、例えば、友だちをほめる言葉をカードに書いて貼り付ける掲示を作っている学級もある（写真11）。このような肯定的な相互評価を行うことによって、生徒同士の人間関係がよくなり、その結果、授業でのグループワークが行いやすくなっている。さらに、学習面や生活面での自己目標を設定させることも多く、それによって自主的・自立的な自己学習を意識的に行えるようにしている（写真12）。



写真11 一人一人のよさをほめるカードを貼り付けた学級の木



写真12 自分自身の生活面と学習面での目標を宣言したカード

以上のような多様な取組は、学校長の強いリーダーシップによるところが多い。当校では、学校長の提案するビジョンに教員が協力して取り組む体制ができている。

また、生徒は授業や自学ノートといった教科学力の向上に積極的に取り組むだけでなく、朝のランニングや部活動に大変積極的に取り組んでいて、詰め込み教育に偏ることなく、豊かな学力観や人間性のとらえ方に基づくバランスのとれた教育を行っていることがわかる。加えて、紹介したように生徒のやる気や学習意欲を高める多様な工夫がなされていて、生徒の主体性や自主性を生かしている。

こうした総合的な取組が、当校の学力向上に大きな成果を生み出していることが分かった。

(4) D 市立 D 中学校

1 概要

当校は、8年前の合併でD市に編入された地域に属しており、地域の人々は古くからの定住者がほとんどである。地域の特性として、3世代同居の家庭が多く、地域内のつながりが強い。学校運営にも大変協力的であり、子どもたちも非常に穏やかである。

2 学力水準

学力水準は、全国学力・学習状況調査の結果から考えると、平成19年度～26年度までかなり変動があるように感じられる。平成26年度は、比較的高い成果を上げていると判断できる結果であった。学校長の学力に関する実感としては、まだ、それほど良いとは思えない。特に応用的な考え方に関してはまだまだ、伸びる要素があるという見解であった。

3 授業等の取り組み

平成26年度までの研究主題「学び合いで心をつなぐ授業の在り方の研究」を推進してきており、子ども同士で学び合い支え合うという風土がある程度できてきたと考えている。26年度の学力調査の結果にもある程度は反映されていると思われる。27年度以降に、この経験を踏まえて、学力向上へとつながる学習活動を推進させている。実際の授業を参観して、特徴ある取り組みとして、机の配置が工夫されていた。どの授業においても、子ども同士がある程度向き合うような形をとっていた。全員が教師のほうを向いて授業を受ける一斉授業のスタイルであっても、必ずしも黒板に正対するのではなく、各自が、中央に向けて少し机を傾けて座っていた(写真1)。そのようなことを意識することによって、子ども同士の発言を促す授業づくりにつながっていると考えられる。また、教室に一台電子黒板が配置されており、教員は日常的にそれを用いながら授業を行っていた(写真2)。

4 教科指導における取り組み

当校の取り組みとして、特徴的な点として、下記の2点が挙げられる。

一つは、「子ども同士が日常的に聴きあう、学びあう関係」の構築である。そのため、机の配置を工夫し、授業の中でも子どもたちのコミュニケーションを大事にしている(写真3)。また、日常の授業の中にジャンプのある課題(いわゆる応用的課題)を子どもたちに投げかけ、子どもたち同士で考えを交流するという取り組みを行っている(写真4)。

二つには、小中一貫校の強みを生かしたTTを行っている点である。小学校、中学校ともに数学(算数)に課題があるので、小学校、中学校それぞれの数学(算数)の授業でTTを取り入れている。小学校のTTには中学校の教員が入り、中学校の授業には小学校の教員がTTで入る。そのため、小学生の段階から中学校の先生と授業を行える経験を持ち、中学生には慣れ親しんでいる小学校の教員が定期的に授業に来てくれるという点において、非常に子どもたちの勉強のモチベーションに寄与していると考え

えられる。



写真 1



写真 2



写真 3



写真 4

5 家庭学習の在り方・保護者連携

地域の実情として、近くに学習塾がないので都市部ほど下校後の学習時間が多いわけではない。それだけに、学校教育に期待するところが大きい。学校では、帰宅のためのバスや保護者の迎えを待つ児童・生徒の宿題を支援したり、個別の状況に応じた学習支援に力を入れたりしている。また、高学年には自学ノートなどを課して、家庭での自主的な学習習慣の定着に努めている。

6 小中連携に関して

学校が「小中一貫校」であるため、特別意識することなく小中連携はできている。中学校という意識はなく7年生～9年生という表現で小学校からの連続を意識している。

教員組織は、発達段階に応じて3つのブロックに分かれている。1年生～4年生の前期ブロック、5年生～7年生の中期ブロック、8年生～9年生の後期ブロックの3つである。この中の中期ブロックは小学校の先生と中学校の先生とが入っているブロックになっており、そこでの先生の教育研究活動が、そのまま小中連携の中核的役割を担っている。また小中一貫校で職員室が同じであるため、小学校の先生は中学校の（学習）活動を見越して教育カリキュラムを考えることが可能であり、中学校の先生は小学校の学習活動を踏まえたうえで教育カリキュラムを考えることが可能である。

7 低学力層の底上げ

小規模の学校ではあるが、習熟の高い子から勉強の苦手な子まで様々である。学校として特別に補習授業などの取り組みを行っているわけではないが、人数が少ない分、個別のアプローチを行いやすい。放課後などの時間を利用して、学習に困り感を持つ子どもへの個別指導を積極的に行うことを学校全体で取り組んでいる。

無解答に関して確認しているがそれほど多くはない。日頃の授業や特別活動等の中で、分からないことがあっても最後まで粘り強く取り組むよう指導を継続している。

8 教員研修

教員研修として、全体（小中合同）の授業研修を年2回行っている。また、ブロックごとに授業研修計画を立てるなど研修計画自体を小中合同で行っているところに特色がある。そのため、中学校の研修も小学校の先生と合同で行うため、教科の専門性のみならず、子どもとの関わりという視点を大事にしている。また、全ての教師が年に最低1回は授業を公開している。

9 総括的考察

生徒の人数が少ない分、教科指導や生徒指導に先生たちの配慮が非常に多く入っていることが特徴としてあげられる。また、小中一貫校の特色を生かして、中学校のみではなく、1年生から9年生にわたって、長いスパンで子どもの発達を捉えて教育を行っており、それに合わせるように教員組織が構成されている点も大きな特徴といえる。

子どもたち同士もお互いの距離が近く、授業の場においても「学びあい」が徹底されており、机の配置なども良く工夫されている。教師も日々授業を工夫しながら行っており、子どもたちもその状況に慣れている。また、電子黒板等のICTを使って行う授業が日常となっている。

小中一貫校であり、少人数という学校の特徴を生かして、全体としてきめ細やかな教育を行っている印象のある学校である。

(5) E 市立 E 中学校

1 学校の概要

当校は、全生徒で 48 名（平成 26 年 12 月 17 日当時）の小規模校である。学校区は小学校一校のまとまった小さい校区である。学校のホームページの叙述によれば、校区は、農村地帯であるが専業農家は少なく、ほとんど兼業農家である。当該市の中心部とも地理的に近く、また、道路事情もよいため経済・文化について結びつきが深い。地域住民は学校教育に対して深い関心を示し、学校によせる期待が強く感じられる。また、PTA・公民館など各種団体は学校教育に対して協力的である。

同校の教師たちは、「1）生きる力を育む教育の推進、2）キャリア教育の推進」というねらいの下、そのためのアプローチとして、「学び高め合う」ことを重視している。

全国学力・学習状況調査の結果では、この学校の生徒の学力は、平成 25 年度、26 年度と次第に高まっている。平成 26 年度は、特に、国語の問題 B の平均正答率が高い。

2 授業づくりの特徴

第 3 学年の国語の授業を見学した。それは、新古今和歌集の 4 つの句について、グループでその意味、創作の背景等を調べた結果を報告し、その内容について意見交換をする授業であった。授業者は、表現力等の育成を学習目標に設定していた。また、その理由を「調べたことを、効果的にいかに発表できるか——本校の生徒は、人前に出て話したり表現したりするのが苦手であり、質問役をあえて指定したのは、批判的な質問をする関係を作れていないためである。図書館等で調べてまとめることも、もう一つのねらい。なお、調べる時間は授業時間内で、まとめ（発表資料）は、家庭で行ってきた。全員参加、発言させたかった」と述べた。

この授業を含む、当該題材の学習は、いわゆる活用型授業として構想され、実践されていた。生徒たちは、句の背景や歌人の経歴等を調べて発表資料にそれらをまとめていたが、多くのケースにおいて、デザインが工夫されていたり、イラストが描かれていたりといった美術科の要素を作品に見いだすことができた。

一方で、本時及び題材の指導全体において、教師の指導も十分に発揮されていた。それは、例えば「前単元では、教員がモデルとして内容や作者等々を説明し、子どもに響く部分を丁寧に伝えてきた」「調べる視点については、共通する部分と自由に発表する部分があった。共通部分は、歌意、表現技法、作者。その和歌の魅力もあれば伝えてねと伝えていた」といった授業者のコメントに代表される。

続いて、第 1 学年の数学の授業を見学した。この授業では、指導者が前時の角柱や円柱の体積の求め方を確認した後、生徒が角錐や円錐の体積の求め方を「数学的な活動」を拠り所にして、グループや全体で交流し、検討していった。そして、最終的には、指導者が、デジタル教科書の動画コンテンツを用いて、それを確認していた。

この授業のねらいについて、指導者は、「子どもたちに考えたことを説明できるように、基本的には指導している。『ああ、わかった！』という部分を、自分たちで感じることであれば主体性が出てくると

思っているので、言葉にすることを大切にしている」と述べた。また、「数学的な活動の導入（展開図や四角すいなどを作る）には時間はかかるけれど、触ったりすると理解が深まるとは思っているので、時間はかかるが、それは仕方ないかと。1時間の中で復習をしたいが、展開図を見せるようにしたかったし、つくる喜びを感じるのが大事だ」と、指導方法の工夫の意図について語った。

授業中、グループ活動では、生徒たちが体を寄せて夢中感を漂わせて、学びあっていた。小学校からずっと同じメンバーなので、そうした活動ができると聞いた。

いずれの授業においても、教師の指示や説明と子どもの自律的な学びのバランスが保たれていた。その上で、全体として、子どもたちの主体的な活動が基軸となる活用型授業が展開されていた。また、それに、研究主題に即して、いわゆる「学び合い」が適切に位置づけられていた。

3 特色ある取組

授業において子どもたちが「学び高め合う」ことを尊重する意識を、教職員全体が持っている。そのために、ペア学習やグループ学習の方法論を、学校全体で研修しているようだ。どの教科でも、個・ペア・グループの3つの学習形態を導入することを大切にしていると聞いた。しかも、意図的に編成したグループをまず作り、そこから、ペア活動やランダムなグループによる活動に展開するという工夫を取り入れているようだ。

感性は悪くないのに自己主張しないという子どもたちの実態を踏まえて、同校の教師たちは、国語科において探究的な学習を繰り広げている。具体的には、「実践国語教室」という俳句や短歌を作成するプログラムを教育課程に位置付けている。子どもたちは、このプログラムにおいて、フィールドワークを含む、俳句や短歌の創作学習に3年間従事する。調べた言葉を基に俳句等をつくり、それに絵を書き加えて発表する活動を、子どもたちが自然と行っているようだ。

国語の担当者は、言語活動の充実も重視していると語った。まず、新聞や作品、感想などを、掲示したり、生徒のものは称賛したりすることをていねいに行っているようだ。また、学校行事の度に、その感想等を書かせているとも聞いた。

低学力の子どもたちに対する指導に関してたずねると、そうした子どもが授業に参加していけるように、助け合う仲間関係を構築したり、グループ編成を工夫したりすることを大切にしていると教師たちは述べた。また、個別指導を行ったり、レベルに応じた課題を出したりするようにしているとも語った。

この学校は、家庭学習の充実にも組織的に取り組んでいる。注目したいのは、展開図を切ってきたり、発表ポスターを作成してきたりといった、次の授業に資する予習型・調査研究型の宿題を生徒に課していることである。なお、保護者に学習の手引きを配る、TVやPC、スマホなどの利用について家庭でも使い方を指導してもらおう等、家庭学習の充実を含む「学びの基礎力」の育成に関しては、家庭との連携もしっかりしているようだ。

小中連携も、1年間に10回の合同研修会を催すことに象徴されるように、まず量的に確保されている。また、例えば、小学校の教室掲示を子どもたちが踏襲している、小学校の児童と中学校の生徒の合同学習が年間5回（1回25分間）設定されているといった取り組みからすれば、質的にも整っている。

4 総括的考察

この学校は、小規模の中学校の学力向上のよきモデルといえると思う。それは、学年間、教科間、小中学校間の学力向上に資する取り組みの「共通化」と「徹底」に象徴される。

具体的には、「学び合い」「書くこと」などがあらゆる教科の指導において重視されている。そして、それが、小規模校ゆえに、しっかりと浸透している。すべての教科において、単独の教師が3学年の授業を担当しているが、それに関して、教師たちは、「1人で3学年の授業を担当するのは、準備が大変だけれども、3学年を見渡した指導ができる。面白いのは、自分の組み立てで授業ができ、タイムリーな教材を使える。常に学年を越えて教材やカリキュラムを考えることになるので、授業力が高まる」と、3学年の授業を担当することの指導法の「共通化」や「徹底」に対する好影響を述べている。

なお、問題 B で測定する学力を高めるためには、活用型・探究型の授業経験が教師や子どもに必要とされるのであるが、それに資するものとして、この学校の国語実践教室の取組は注目に値する。その特長は、体験的学習、それを保証する75分の授業×10回のカリキュラムである。そうした「言葉を大切に学びあう」経験を礎にして、この学校では、「書くこと」の重視が他の教科の指導においても機能しているように思われる。換言すれば、生徒の国語の学習における学びのスタイルの確立とそれによる学びの充実の原体験が、生徒の他教科における学びに波及していると推察される。

第7章 統計分析による調査結果

(1) 本章の分析の目的

本調査研究では、「全国学力・学習状況調査の結果において、比較的課題の多い地域の中で、良好な結果を残している学校を対象に、当該学校における取組の詳細を、訪問調査を通して明らかにする」ことを目的に、実際に全国学力・学習状況調査の結果を基に何校かの学校を選定し、訪問調査を行ってきた。校長や教頭、研究主任等の学校関係者の話をもとに、「良好な結果を残している学校」に関してのいくつかの傾向を示唆することができた。そこで本章では学習状況調査の結果を分析し、第5章及び第6章で示唆することのできた訪問調査結果に関して、学習状況調査（児童生徒質問紙調査）の結果からの妥当性の検証を行うことを目的とした。

学習状況調査は、その学校に在籍している児童・生徒たちに対して行われるものであり、当該学校の子供も達の特徴を表す一つの指標と考えることができる。そこで本章では「学習状況調査」の結果を基に、全国の小学校・中学校を類型化しその特徴をもとに、第3章で選定した学校の訪問調査結果との関連を検討した。その際に、類型化された学校群の特徴を、全国学力・学習状況調査の学力調査結果との関連からも明らかにしていく。

(2) 計画・方法

本章では、平成26年度の全学校のうち、第3章の学校選定の際に抽出した学校、すなわち下記の2条件を満たす学校を対象とした。分析対象学校は、小学校では17,202校（全20,380校中）、中学校では8,929校（全10,238校中）であった。なお、分析にあたっては、小学校、中学校それぞれ独立で行った。

1. 対象学年（小学校；6年，中学校；3年）の学力調査の受験者がすべての科目（国語A，国語B，算数（数学）A，算数（数学）B）において11人以上の学校
2. 小学校・中学校ともに選定対象学校を公立の学校に限定した。さらに、その中から特別支援学校を除いた学校

分析にあたっては、学習状況調査（小学校、中学校ともに全74項目）をその内容の観点から16の質問群に分類を行い、それぞれの回答の数値化を行った。また学校の類型化にあたってはクラスターアナリシスを用いた。

① 学習状況調査の調査票の構成及び使用変数の選択

学習状況調査の調査票は、小学校、中学校ともに計74問で構成されている。74問すべてが名義尺度もしくは順序尺度であったが、それぞれの尺度を順序尺度と見なして得点化して本研究では利用した。その際に、得点化にそぐわない項目が4項目あり、その項目を本分析から除いた。具体的には、質問番号26（「学校生活で、友達関係など何か悩みを抱えたら、誰に相談することが多いで

すか)], 質問番号 49 (「授業の中で分からないことがあったら, どうすることが多いですか」), 質問番号 59 (「今回の国語の問題について, 解答を文章で書く問題がありましたが, どのように解答しましたか」), 質問番号 72 (「今回の算数の問題について, 言葉や数, 式を使って, わけや求め方などを書く問題がありましたが, どのように解答しましたか」) の4つであり, 順序性のない名義尺度の項目である (なお, 質問番号 59 および質問番号 72 では, 小学校と中学校で若干の質問内容が異なっているが, 基本的な意味内容は同一のため, 小学校のみ提示した)。以上の事より, 本章での分析では, 小学校, 中学校ともに学習状況調査 74 項目中 70 項目を用いて分析を行った。

② 質問項目の分類

本分析で用いる 70 の質問項目を, その内容から下記の 16 の質問群に分類した。

1. 生活習慣 (3 項目, 回答番号 1~3)
2. 自己評価 (4 項目, 回答番号 7~10)
3. 遊び習慣 (3 項目, 回答番号 11~13)
4. 勉強習慣 (5 項目, 回答番号 14~18)
5. 家族 (2 項目, 回答番号 19~20)
6. 家庭学習 (4 項目, 回答番号 21~24)
7. 学校生活 (3 項目, 回答番号 25, 27~28)
8. 地域 (3 項目, 回答番号 29~31)
9. 時事 (2 項目, 回答番号 32~33)
10. 倫理・規範 (5 項目, 回答番号 34~38)
11. 総合的な学習 (2 項目, 回答番号 39~40)
12. 学校の授業 (8 項目, 回答番号 41~48)
13. 国語 (9 項目, 回答番号 50~58)
14. 国語教科調査 (2 項目, 回答番号 60~61)
15. 算数 (数学) (10 項目, 回答番号 62~71)
16. 算数 (数学) 教科調査 (2 項目, 回答番号 73~74)

③ 回答の得点化

先述したとおり, 本分析で用いる 70 の質問項目は, 名義尺度または順序尺度である。順序尺度は, それぞれの質問項目の内容に関して数値の大きい方が質問項目の内容を反映しているように, 値を変換した。また名義尺度に関しては, 学校教育の目標に合致している反応が大きくなるように得点を変更した。具体的には, 各質問項目の回答を下記のように変換を行った。

- 1) すべての質問項目において, その他 (選択肢 9) を無回答 (0) と同じく, 得点に反映しないよ

うに「0」とした。

- 2) 質問項目 11～18 (質問項目 16 を除く)、質問項目 32～33 の 9 つの項目は名義尺度であるが、内容は「時間の多寡」を尋ねている項目である。そのため、学校教育の目標に合致するように内容の変更を行った。具体的には、テレビやゲーム等の余暇に費やす時間に関しては少ない方が高得点に、勉強の習慣や新聞等を読んでいるかどうかに関しては、より多くの時間を費やしている方が高得点になるように調整した。具体的には下記のとおりである。

質問項目 14, 15, 17 : 1→6, 2→5, 3→4, 4→3, 5→2, 6→1

質問項目 18 : 1→5, 2→4, 3→3, 4→2, 5→1

- 3) 質問項目 16「学習塾(家庭教師を含む)で勉強をしていますか」はどのような学習内容をしている学習塾に通っているのかを聞いている項目である。具体的には応用的な内容の学習をする学習塾、補充的な内容の学習をする学習塾、そのどちらともおこなう学習塾、どちらともいえない学習塾という選択肢であり、内容によって得点化することはできないため、学習塾に通っているかどうかの 2 件法の項目へと質問内容を変換して得点化を行った。具体的には、学習塾に通っていれば(内容によらず)「1」、通っていなければ「0」というように変換した
- 4) 上記以外の 60 の質問項目は、4 件法の順序尺度のため、質問項目の内容をより反映しているものが高得点になるように得点を変換した(1→4, 2→3, 3→2, 4→1)。

④ 分析手順

- (1) 学習状況調査の児童・生徒の回答結果を 7.2.3 節の手順で変換を行った。
- (2) 児童・生徒毎に、7.2.2 の質問群ごとに回答の合計を求めた。
- (3) 学校ごとに、7.2.2 の質問群の児童・生徒の平均を算出した。
- (4) 上記の学校ごとに算出した 16 の質問群の平均得点(基準化したもの)を基に、K-Means と呼ばれる非階層的クラスタリング手法であるクラスタ分析を行い、学校の類型化を行った

なお、K-Means によるクラスタリングは、下記のアлゴリズムで行われる。

1. 各ケースにランダムにクラスタを割り振る。
2. 割り振ったケースをもとに、クラスタの重心を算出する。
3. ケースと各重心との距離を算出し、一番距離の短い重心のクラスタへとケースを割り振りなおす。
4. 上記の手順 3 において、ケースの割り振りに変化がなければ、そこで終了となる。もし、ケースの割り振りが行われた場合、手順 2・手順 3 を再度繰り返す。

(3) 結果

① 各質問群の概要

学習状況調査の 70 の質問項目の回答を 7.2.3 に示した方法で得点化を行い、7.2.4 の手順で学校ごとに 16 の質問群の平均を求めた。小学校および中学校の各質問群の概要は下記の表 7.1, 表 7.2 に示す。

* 下記の表は、学校ごとに集計した平均値の概要である。

表7.1 質問群の概要(N=17202) (小学校)					表7.2 質問群の概要(N=8929) (中学校)				
	最小値	最大値	平均値	標準偏差		最小値	最大値	平均値	標準偏差
生活習慣(3項目)	8.24	11.92	10.43	0.36	生活習慣(3項目)	8.27	11.94	10.22	0.32
自己評価(7項目)	17.55	26.78	22.08	0.96	自己評価(4項目)	16.33	25	21.10	0.81
遊び習慣(3項目)	7.76	17.36	12.88	0.86	遊び習慣(3項目)	7.8	18.03	11.68	1.07
勉強習慣(5項目)	7.47	18	12.60	1.15	勉強習慣(5項目)	7.58	17.73	12.19	1.09
家族(2項目)	5.58	8	7.06	0.24	家族(2項目)	3.95	7.67	6.42	0.35
家庭学習(4項目)	7.71	15.92	11.63	0.86	家庭学習(4項目)	7.18	14.28	10.68	0.79
学校生活(3項目)	5.73	12	9.88	0.62	学校生活(3項目)	6.88	11.64	9.53	0.53
地域(3項目)	5	11.23	8.13	0.67	地域(3項目)	4.97	10.33	7.21	0.68
時事(2項目)	3.75	7.67	5.19	0.36	時事(2項目)	2.27	6.86	4.94	0.32
倫理規範(5項目)	14.06	20	18.02	0.61	倫理規範(5項目)	14.89	19.94	18.09	0.50
総合的な学習(2項目)	0	8	6.03	0.53	総合的な学習(2項目)	0	7.73	5.54	0.56
学校の授業(8項目)	18.78	30.19	24.36	1.11	学校の授業(8項目)	17.87	28.17	22.89	1.36
国語(9項目)	20.73	34.83	27.21	1.48	国語(9項目)	18.06	33	25.90	1.48
国語教科調査(2項目)	3.78	7.82	5.95	0.40	国語教科調査(2項目)	0.38	7.91	6.66	0.35
算数(10項目)	23.74	39.42	32.24	1.64	算数(10項目)	19.85	37.35	29.81	1.53
算数教科調査(2項目)	4.17	8	6.58	0.36	数学教科調査(2項目)	0.38	8	6.58	0.36

② 学校の類型化

上記 16 の質問群の得点から標準化得点を算出し、非階層的クラスタ分析を行い、小学校 17,202 校、中学校 8,929 校の類型化を試みた。なお、非階層的クラスタ分析を行った際には、3 から 5 までのクラスタ数で分類を行い、探索的に最適なクラスタ数の決定を行った。小学校、中学校ともに、3 分類から 4 分類、5 分類と分類数を増やしても、特定のクラスタが分離するだけであり、質問群ごとの解釈に変化は見られないことから、3 分類が一番妥当であると判断した。以上の点を考慮し、小学校、中学校ともに解釈の最も容易である 3 分類を採用した。以下、それぞれの群を小学校、中学校それぞれ便宜上、X 群・Y 群・Z 群と標記する。なお、X,Y,Z はひとまとまりに集まったデータに便宜上付与した群名であり、特別な意味があるわけではない。小学校、中学校の各群に含まれる学校数は下記のとおりである。

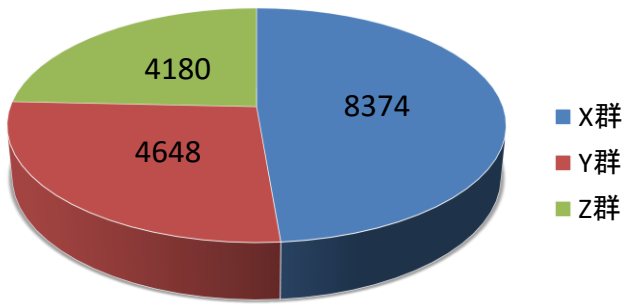


図7.1 各群の学校数(小学校)

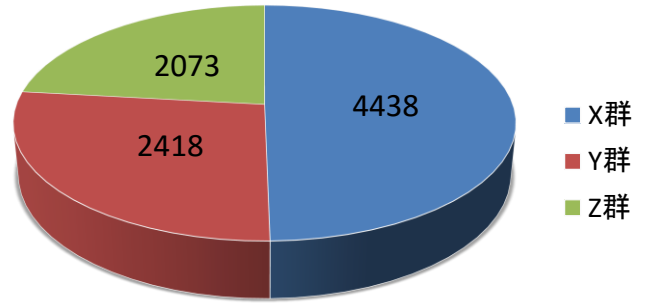


図7.2 各群の学校数(中学校)

③ 各群と質問項目群の得点との関連

非階層的クラスタ分析で分類された3つの群について、小学校、中学校それぞれに関して各群の特徴を16の質問群の標準化得点から検討を行った。16の質問群に対する各群の平均は下記の図7.3(小学校) 図7.4(中学校)に示す通りである。

以上の結果より、各学校の児童の学習・生活状況に関する特徴は下記の通りと考えられる。

小学校 : Y群 > X群 > Z群

中学校 : Z群 > X群 > Y群

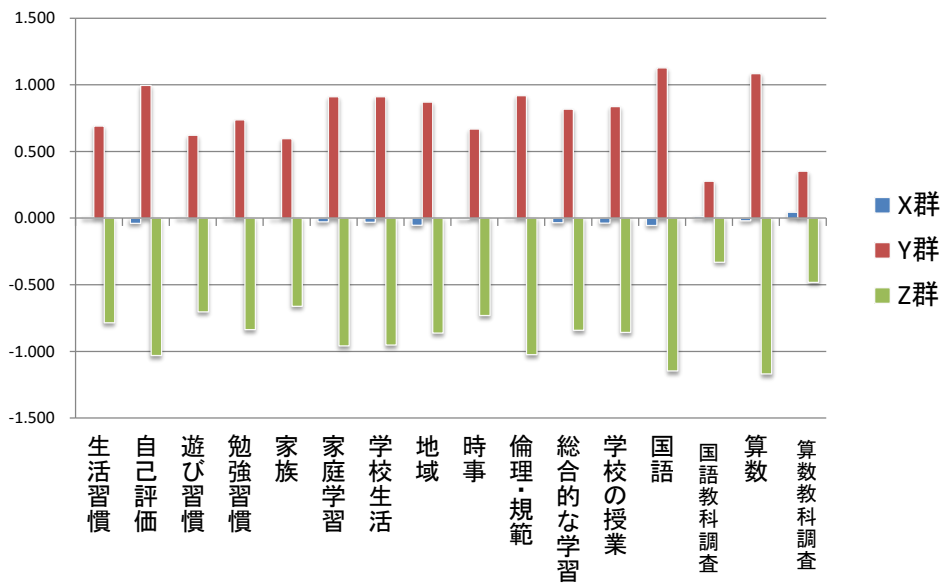


図7.3 クラスタ分析結果(3群)の質問項目ごとの概要(小学校)

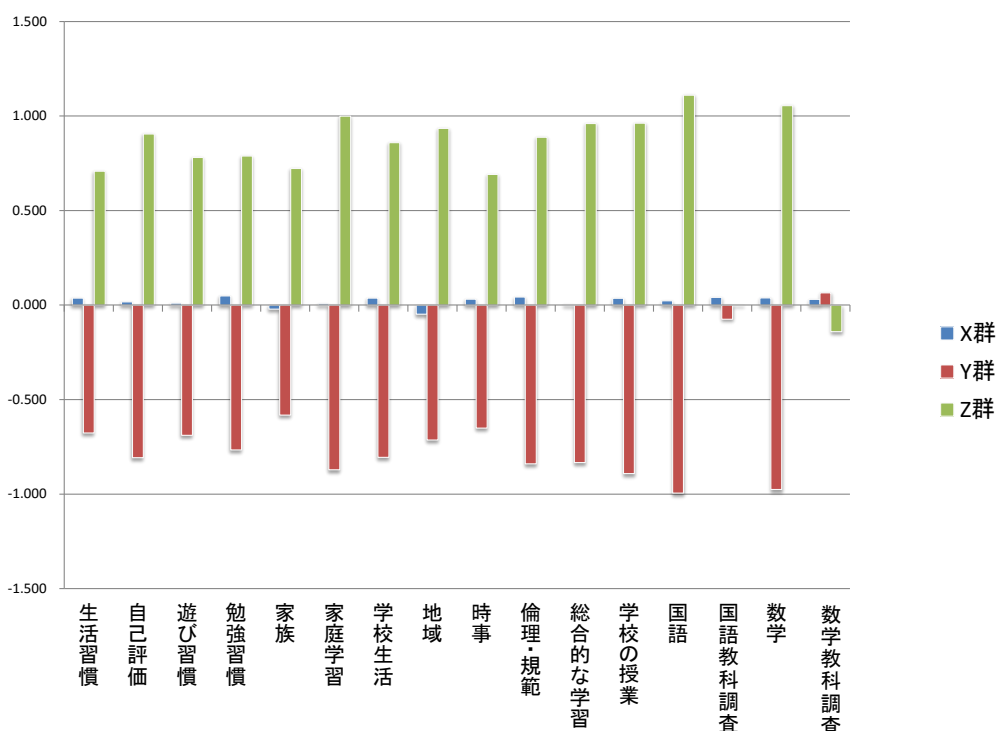


図7.4 クラスター分析結果(3群)の質問項目ごとの概要(中学校)

④ 学校類型化と学力調査結果との関連の検討

各群の特徴を明らかにするため、学力調査の結果との検討を行った。各群の国語A、国語B、算数A、算数Bの4科目のテスト得点の概要は表7.4のとおりである。

4科目の得点において各群で差異があるかを検討するため、一要因の分散分析を行った。分散分析を行った結果、全ての科目において、有意差が見られた。また、Tukey法における多重比較の結果も、小学校、中学校全ての科目の全ての群間において、有意差が見られた。

	群	小学校			中学校		
		平均値	標準偏差	分散分析	平均値	標準偏差	分散分析
平均正答数_国語A	X	10.92	0.77	F(2,17199)=1507.19, p<.001	25.54	1.16	F(2,8926)=1018.21, p<.001
	Y	11.30	0.82		24.57	1.31	
	Z	10.36	0.87		26.25	1.38	
平均正答数_国語B	X	5.54	0.59	F(2,17199)=2095.49, p<.001	4.62	0.50	F(2,8926)=901.62, p<.001
	Y	5.92	0.68		4.24	0.49	
	Z	5.05	0.65		4.91	0.64	
平均正答数_算数A	X	13.29	0.80	F(2,17199)=1816.59, p<.001	24.36	2.14	F(2,8926)=848.31, p<.001
	Y	13.74	0.85		22.79	2.31	
	Z	12.66	0.95		25.57	2.51	
平均正答数_算数B	X	7.53	0.80	F(2,17199)=1690.06, p<.001	9.03	0.97	F(2,8926)=945.86, p<.001
	Y	7.95	0.92		8.27	1.04	
	Z	6.90	0.86		9.59	1.14	

各群と標準化した学力調査結果との関連は図 7.5（小学校）、図 7.6（中学校）の通りである。グラフからも明らかなように、質問紙調査票での回答傾向と同様の傾向が、学力調査結果からも見て取ることができる。

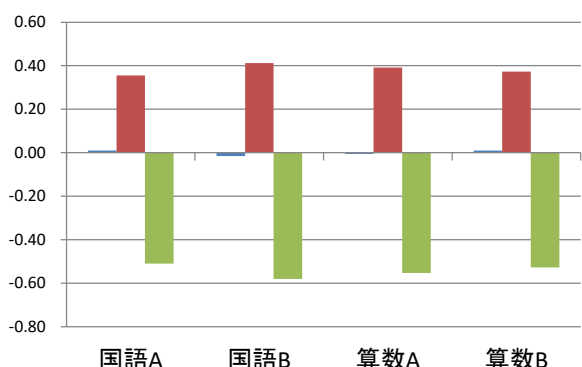


図7.5 各群と学力調査結果との関連(小学校)

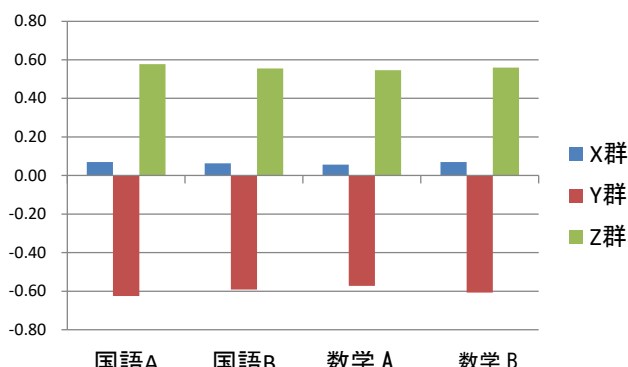


図7.6 各群と学力調査結果との関連(中学校)

⑤ 学習状況調査による学校の類型化のまとめ

本章では、児童・生徒による学習状況調査の回答（小・中学校ともに 70 項目）から、学校の類型化を試みた結果、小学校、中学校ともに 3 群が最も解釈しやすい類型であることが分かった。本節では、これまでの検討結果を基に、各類型の解釈を試みることにする。

本章の分析は児童・生徒が回答した学習状況調査の結果を、学校ごとに集計しその集計結果を基に学校の類型化を行っている。よって、学校の類型化はどのような児童・生徒が学校に在籍しているかの傾向と捉えることができる。これまでの分析結果より、小学校、中学校ともに 16 の質問群ごとに異なった傾向がみられるのではなく、16 の質問群全てで 3 群の傾向は同様の結果を示している。すなわち、小学校においては、【Y 群 > X 群 > Z 群】の順であり、中学校では、【Z 群 > X 群 > Y 群】の順であった。また、この傾向は、学力調査の結果からも同様に読み取れる。以上の事より、小学校、中学校それぞれの類型化された学校群において、下記の特徴があるといえる。

【小学校】

Y 群：学習状況、生活状況に関して、在籍している児童のスコアから考えると、相対的に良好だと判断できる学校群。特に、家庭学習や国語、算数といった学習面に関して、他群の学校の児童よりも高いスコアを示していることから、学習面に関してよりポジティブに反応する児童が多いという特徴が伺える。学力調査においても、他群の学校よりも良い成績を示していることから、比較的学力が上位の児童が在籍している学校と考えられる。

【良好群】と名付けることが可能である。

X 群：学習状況、生活状況に関して、在籍している児童のスコアから考えると、相対的に平均的な学校群といえる。学力調査においても、他群と比べ平均的な成績を示していること

から、学校としての学力は中位程度の学校と判断できる（必ずしも平均的な児童が集まっていると判断できるわけではない。上位群と下位群の児童が同数在籍している可能性もありうる）。【平均群】と名付けることが可能である。

Z 群：学習状況，生活状況に関して、在籍している児童のスコアから考えると、相対的に低位の学校群といえる。特に自己評価や倫理・規範意識といった意識面、算数や国語といった学習面に関してよりネガティブに反応する児童が多いという特徴が伺える。学力調査においても、他群の学校よりも低位の成績を示していることから、比較的学力が低位の児童が在籍している学校と考えられる。【改善群】と名付けることが可能である。

【中学校】

Z 群：学習状況，生活状況に関して、在籍している生徒のスコアから考えると、相対的に良好だと判断できる学校群。特に、家庭学習や国語，数学といった学習面に関して、他群の学校の生徒よりも高いスコアを示していることから、学習面に関してよりポジティブに反応する生徒が多いという特徴が伺える。しかし、国語，数学の調査時間に関する回答では、他の質問項目群ほど高い反応は示しておらず、数学の調査時間に関しては他群よりも足りないという回答であった。このことより、より多くの時間をかけてじっくりと問題に取り組みたい生徒の多い群と考えられる。学力調査の結果においても、他群の学校より4科目全てにおいて良い成績を示していることから、比較的学力が上位の生徒が在籍している学校と考えられる。小学校のY群と同等と考えられる。小学校と同様に【良好群】と名付けることが可能である。

X 群：学習状況，生活状況に関して、在籍している生徒のスコアから考えると、相対的に平均的な学校群といえる。学力調査においても、他群と比べ平均的な成績を示していることから、学校としての学力は中位程度の学校と判断できる（必ずしも平均的な生徒が集まっていると判断できるわけではない。上位群と下位群の生徒が同数在籍している可能性もありうる）。小学校のX群と同等と考えられる。小学校と同様に【平均群】と名付けることが可能である。

Y 群：学習状況，生活状況に関して、在籍している生徒のスコアから考えると、相対的に低い学校群といえる。特に数学や国語といった学習面に関してよりネガティブに反応する生徒が多いという特徴が伺える。学力調査においても、他群の学校よりも低い成績を示していることから、比較的学力が低位の生徒が在籍している学校と考えられる。小学校のZ群と同等と考えられる。小学校と同様に【改善群】と名付けることが可能である。

(4) 本調査における訪問選定校の学校類型

第3章で選定した、本研究における調査対象校の学校については、小学校10校のうち、平均群が3校、良好群が7校であった。中学校については、いずれも良好群であった。

第8章 総括的考察 成果を上げている学校の特徴

教科別学力調査の平均正答率という観点から比較的課題が多い道府県においても、良好な結果を示している学校では、次のような10のポイントで特色ある取組を実施していることがわかった。

① 学校独自の特色ある取組を中心として多様な指導方法を展開している

学力向上につながる特色ある取組は、各学校において例えば図書館利用教育であったり、自学ノートの体系的実践であったり、家庭学習の充実であったりと、多様である。また、学習の見通しとまとめを含む構造的板書の工夫をしている学校も多い。さらに、廊下や廊下の壁面を、新たな学習環境として再構築し、様々な掲示や展示、表彰の工夫をしている。

これら全てを実践している学校があるわけではないが、今回の調査研究の対象として選定した学校においては、できる限り多くの特色ある取組を実践しようとして計画的な努力を続けている学校ばかりであった。

② 特色ある多様な指導方法の中には、教科の学力向上と直接関わらない指導法、例えば、食農教育、体力向上、学習発表会、総合的な学習の時間における地域連携などの豊かな教育活動が多く含まれる

興味深いことに、そうした多様な取組の中には、直接的には学力向上の手立てではないものが必ず含まれていることがわかった。

具体的には、稲作りを通じた食農教育や、毎朝のランニングや長距離ウォーキングなどの体力向上の実践、歌唱や楽器演奏などの集団づくりを伴う音楽的行事の実施、そして総合的な学習の時間における地域人材を活用した体験活動の充実などであった。

こうした取組は、直接的な効果を学力向上に対して及ぼすものではないが、実際には各学校において重要な位置づけを与えられ、積極的に行われている重点教育活動といえるものになっている。その意図は、明らかに間接的な効果をねらいとして、例えば、集団の支持的・協力的態度の醸成、責任を持って行動する態度の育成、忍耐力や集中力の向上、多様な他者とのふれあいによる規律やマナーの向上など、学力向上の基盤となる基礎的な資質・能力を育てようとしているのである。

いいかえれば、学力向上に成果を上げている学校では、このような裾野の広い豊かな教育活動が展開されているのであり、決してドリル反復練習や過去問対策、土曜補充指導といった学習の量を増やすだけの取組を中心に行っているのではないことがわかった。

③ 授業中の学習規律が徹底されるとともに、認め合い支え合う関係が育成されている

一言でいえば、学力向上の成果を上げている学校では、学級経営がしっかりとできているということである。チャイム着席や授業の道具の準備といった授業開始前のルール徹底に始まり、認め合うグループワークや発表を通した認め合いなどの支持的態度の育成、そしてグループワークでの教え合いの活性化、さらに授業中の姿勢や集中力といった学習規律までがしっかりとしているのである。

もちろんこれらは、教科指導の場面で全教職員が一貫した指導を行うことを通して身につけさせるものであるが、それだけでなく、先述したような多様で豊かな教科外の教育活動を通しても育てられているのである。

こうした集団のもつ学級力の高さが、学力向上の基盤となって機能していることがわかった。

④ 宿題と自主学習を含む家庭学習の習慣化を図る仕組みが機能している

小学校では中学年以上、そして中学校においては全学年で、家庭学習の充実策が大変積極的に取り組まれている。自学ノートの作成はもちろんのこと、家庭学習における時間管理や目標管理、家庭学習がしにくい児童生徒への補充指導の提供、家庭学習に関わる表彰制度など、多様な取組を工夫している。

こうした家庭学習の充実が、学校学習の基盤となって、高い学力の実態を生み出している。

⑤ 基礎的な習得学習だけでなく、活用問題を用いた活用学習（活用を図る学習活動）までを実施している

これについては、まだ全ての学校で実施されているとはいえないし、また実施している学校でも全教科・全単元で行っているわけではないが、限られた場面であるにせよ、学習指導要領でいう「活用を図る学習活動」をしっかりと教科指導に組み込み、課題を達成して説明したり発表したりする学習や、分析したことを書いて表現する授業などに取り組んでいる学校が多い。

いい方を変えれば、全国的な学力調査の問題 B に相当する活用問題を授業で取り上げ、その解決を行う授業までを実施している。

つまり、学力向上に大きな成果を上げている学校では、活用型学力の育成を念頭において、基礎的学力の習得だけでなく、活用型学力である思考力・判断力・表現力までを想定した授業を行っている。そのことが、問題 A と問題 B の両方を含む全国的な学力調査において良好な結果を出すことにつながっていることはいうまでもない。

⑥ 新聞記事の要約と感想文、読書感想文、図や式と言葉を組み合わせるワークシート、並行読書による調べてまとめる学習など、多様な「考えて書く活動」を実施して書く力をつけ、それが無答率の減少につながっている。

前回受けた委託研究報告書（平成 22 年度）において、秋田県と福井県の学校では、この「考えて書く活動」を徹底的に指導していることが、学力向上の大きな要因になっていることを指摘した。今回はその 4 年後の調査になるわけであるが、そのことが、調査対象としたすべての学校で見られたのである。学力向上において良好な結果を出しているということは、思考力・判断力・表現力、いわゆる活用型学力までも高めているといえる。したがって、今回訪問調査を実施した学校においても、秋田県や福井県と同様に「考えて書く」活動を多様にかつ積極的に指導して、活用型学力を向上させていることは、大変望ましいことである。

⑦ 特別な支援を要する児童生徒への合理的配慮や学力実態に課題のある児童生徒への個別指導の充実、またユニバーサルデザイン（UD：Universal Design）に基づく授業改善を工夫して、学習意欲の向上につなげている。

特別な支援を要する児童生徒や学力に課題のある児童生徒へのきめ細かな指導の充実が、当該の児童生徒の学習意欲を高め、成果を上げていることがわかった。

とりわけ、多くの学校において、学習の目標や過程に関する掲示や視聴覚教材の重視に代表される「可視化」「視覚化」の取組は顕著であった。また、③と関連するが、子ども間の気づきや思考、意見の交流を重視する授業展開が当然視されていた（「共有化」）。

⑧ 自校の学力実態の分析を丁寧に行い、その結果に基づいた意図的・計画的な取組を行っている

これは、全国学力・学習状況調査における学校質問紙の結果によっても明らかにされていることであるが、今回の調査研究の対象となった学校では、自校の学力実態を全国的な学力調査及び道府県や市町村の教育委員会による独自調査の結果を活用して、丁寧に診断・分析して、それに応じた学力向上のための取組を意図的・計画的に行っている。

特に結果の活用においては、1) 習得が不十分な領域についての補充指導、2) 習得が不十分な児童生徒へのきめ細かな指導、3) 平均正答率だけでなく、得点分布の形状の診断による特色ある取組の実施、などにつなげており、診断で終わらずに、取組の改善や追加にまでしっかりとつなげている。

また、いくつかの学校では全国的な学力調査が終了した時点ですぐに自校採点を行い、迅速な学力保証に取り組んでいた。

いいかえるなら、学力向上の R・PDCA サイクルの実践に積極的に取り組んでいるといえるだろう。

⑨ 学力向上に向けたビジョンを学校長が明示し、つきたい力としての多様な汎用的能力の育成を目指して、教頭や教務主任などのミドルマネジメントのリーダーシップのもとに校内の教員が一体となって学力向上の共通の取組を組織的に実施している

この点において大切なことは、校内の全教員がしっかりとした目標意識を持って指導や学習の取り組むということである。

ただ学習時間を増やすとか、学習量を増やすといった単純な目標だけではなく、大人になるまでに生涯学習社会において長期的な視野で身につけておかなければならない汎用的能力の育成と習得をわかりやすいスローガンとして、教員が共有することが大切である。

また、校長や研究部が提案した校内で共通する取組方法に、教員が一体となって協力している姿勢があることである。もちろん全ての取組を共通化するのではなく、特に全校で取り組む特色ある教育活動や、板書のあり方、学習規律と集団づくり、家庭学習のあり方、掲示による表彰制度、ノートの取り方、学習環境の構成など、学力向上の根幹や基盤に関わる指導を共通化し、学年が上がっても担任が替わっても、どの児童生徒も共通して効果の高い指導が受けられる体制づくりができているといえよう。一部の学校においては、そうした学力向上に向けた取組が複数年度に及んで計画・実施されていたことは注目に値しよう。

そのためには、校長や研究部のリーダーシップが大切であるとともに、校内研修の充実により、校内の教員集団が学び合う関係になっていることが重要である。さらに、そうした共通化された多様な取組を、徹底的にやりぬいているといえるほど熱意をもって実践していることがわかった。

⑩ 家庭と地域の教育力を生かした教育活動を豊かに実施している

これは、家庭学習の充実や体験活動の充実において、家庭と地域の協力を得て多様な教育活動を展開することが、児童生徒の学力向上につながっていることがわかった。

これら 10 項目の取組は、全国のどの小中学校においても実施が可能なものである。各学校では、校長と校内ミドルリーダーのリーダーシップのもとに、3年ほどの計画性を持って、より多くの取組を組織的に実施することが望まれるといえるだろう。